

復讐

江崎誠致

毎日新聞社

復 讐

定価 850 円

昭和48年12月 5 日 印刷

昭和48年12月15日 発行

著 者 江 崎 誠 致

編集人 浜 田 琉 司

発行人 朝 居 正 彦

発行所 毎 日 新 聞 社

〒 100 東京都千代田区一ツ橋

〒 530 大阪市北区堂島上

〒 802 北九州市小倉区紺屋町

〒 450 名古屋市中区堀内町

印刷 新 灯 印 刷

製本 佐久間製本

© 1973 MASANORI EZAKI

0093-400090-7904

復

讐

裝
幀
安
東
澄

あるえにし

京都駅新幹線ホームに降り立ったとき、友子は軽い立ちくらみをおぼえた。

暖房のきいた車内と高架のホームでは、かなりの温度差がある。凍てついた寒気の流れが、一瞬彼女の柔らかな毛髪をくぐりぬけ、頭蓋の骨をきゅっと引き締めたのだ。

どこか歓喜の感覚に似ていた。だが、それはほんの短い時間で、友子は小型の旅行鞆を地面におろすと、不安そうに前後を見まわした。迎えに来ているはずの良夫の姿がなかった。

列車から降りた客たちは、みんな勤め帰りのように足早やに階段へ向かって歩いて行く。東京から三時間の京都駅ホームには、旅情をそそる雰囲気はなかった。

友子は腹が立つよりも情なかった。こんなことになるのが嫌だから、どこか宿を決めて落ちあおうと主張したのに、良夫が大丈夫迎えに行くと言って取りあわなかったのだ。友子は、列車が出て行き、人影もまばらになったホームに立ちつくしたまま唇を噛んだ。

「どうかなさったんですか？」

近づいてきたのは、五十年輩の男だった。白っぽいホームスパンの上着にグレーのズボン、冬なのにコートは着ていない。声をかけられるまでは気にもとめなかったが、彼の方では友子の様子を眺めていたらしい。

「夫が迎えに来るはずなんですけど、来ていないんです」

警戒するという意識はなかったが、友子は夫という言葉に力を入れた。

「おやおや。私の方は迎えに来たんだが、乗っていなかった」

男は白い歯を見せて笑った。野心があつて近づいた顔ではなかった。

「奥様？」

「いや。私にそんなものはいない」

男の断固とした言葉に、こんどは友子がくすつと笑った。

「待っていたのは甥っ子ですよ。何も迎えに来なくてもいいんだが、暇がありましたのでね。ま、私の方はかまわんが、あなたの御主人どうなさったのかな。列車の時間まちがえてるのかもしれないね」

「そんなはずはありません。切符は主人が買って、渡してくれたんですから」

「じゃ、御用がすまないでしょう。宿でお待ちになったらどうです」

「それが、主人は昨日から社用であちこち回っておりますので、今日ここで会ってから宿をとることにしていたんです」

「そうですか。じゃまもなくみえるでしょう。じゃ私はこれで……」

男は一旦立ち去ろうとしたが、すぐふりかえつて言葉をついだ。

「余計なことかもしれませんが、この下には伝言板もありますし、案内所に頼んでも伝えてくれますよ。御主人、あなたがいないければおたずねになるでしょう」

「どうも御親切にありがとうございます。でも、しばらく待ってみますわ」

友子は会釈をして礼をのべ、その場を動こうとしなかったが、男の姿が見えなくなれば、すぐにも言われたとおりにしようと思った。

Kホテルの食堂は、外人客で賑わっていた。実際には日本人客の方が多いのだが、派手な色彩の服装や

身振り、それに、アクセントのある声高な話声がその存在を目立たせるため、逆に外人客の間に日本人客がまぎれこんでいるようにしか見えない。

旅馴れぬ友子は、食堂に一步足を踏み入れたとき、その比率が十対一にも感じられて、思わず足が竦んだ。手の甲にまで剛毛を繁らせた大男の前などに連れて行かれたらどうしよう。彼女が怖れたのは、ほとんど満席に見えたからだ。ボーイは窓際に残った空席を見つけて案内してくれた。

渡されたメニューをひろげながら、友子はホテルの食堂にはいったことを少し後悔していた。費用は京都駅で落ちあうはずの夫まかせだったので、小遣程度の金しか用意できていない。

「これにするわ」

しかし、友子がメニューを指さしたところは、ステーキの欄だった。ホテルの食堂には不思議な雰囲気がある。彼女はあれこれ思案していたこととは裏腹に、ほぼ一泊分の宿泊費がふっ飛ぶ最高のステーキを指定してしまったのだ。上客と見たのか、ボーイは畳かけるように、スープは？ ワインは？ とせっつきはじめた。

「やあ、こちらでしたか」

そのとき、声をかけながら近づいてきたのは、昼間、駅で会った五十年輩の男だった。がっしりと肩幅が広く、意外に敏捷な身のこなしをしていた。

「あら、ここにお泊りでしたの？」

友子は救われたように腰を浮かせて男を迎えた。

「これは偶然ですね。お一人？」

「ええ、一時間待ったけど、来ないんですよ。それでおっしゃったようにしました」

友子は嘘を言った。一時間も待ちはない。

「じゃ、ごいっしょしてよろしいかな」

「どうぞ」

ボーイは取りかけていた注文を停止して、男に椅子をすすめた。

「注文はすみましたか？」

「はい。奥様はステーキでございます」

ボーイがかわって答えた。

「ステーキはいい。同じにしよう。私のはレアでたのむよ」

「かしこまりました。奥様は？」

二人の話を聞いていたくせに、ボーイは友子を奥様に仕立ててしまった。

「そうね、あたしミデアムがいいわ」

ワインその他の注文を聞いてボーイが去ると、男はちょっとあらたまった口調になった。

「自己紹介しなければ。私は空閑伴成（がともなり）という者です」

「あたし、安中友子と申します」

「ほう。同じトモさんですね。もっとも、私は通称バンさんと呼ばれていますがね」

空閑は白い歯を見せて笑った。多分父親くらいの年齢と思われる五十男のその笑顔に、友子はふと、夫には感じない男性を感じた。

とりとめのないおしゃべりをしながら、二時間近い長い夕食をすませてシングルの部屋にもどった友子は、妙に気持が浮き立っていて、ひとりで体がはずむのを押えることができなかった。

何の音沙汰もない良夫のことが気にならぬでもなかったが、約束を破ったのは夫の方であり、当然彼が自分をさがしあてるべきだと決めていたので、この日はじめて会った初老の男と夕食を共にしても、友子

はそのことに負担はおぼえなかった。

それどころか、友子の関心は、夫にはない生活の年輪を感じさせる空閑の正体に集中していた。何度かたずねてみたが、彼はその職業をあかそうとしなかったからだ。

「何をなさっていらっしゃるんですか？」

「私か？ さて、何をしているのかな。いろんなことをしているような、何もしていないような、自分でもよくわからないなあ」

「変なの」

「そう。変な男だ」

そんな要領を得ない返事しか聞けず、終始他愛ないおしゃべりをただけで別れてきたのだった。

それは、友子が人妻であることを意識して、立ち入った状態になることを警戒しているようでもあり、何やら気を引くための中年男の手管のようでもあり、友子はいかに空閑の真意を掴めずじまいだったが、それでいて、いらだたしさは少しもおこらず、部屋にもどってからも、体内の血がこころよい温度に上昇したような、音楽の余韻のような感覚が残っていた。

あの人、もしかしたら色事師じゃないかしら——友子は備えつけの浴衣に着換え、バスルームに足を運びながら、ちらりと小さく舌を出した。

まもなく、友子は湯を張った浴槽に裸身を沈めた。シャボンをぬりつける。外国映画をまねて泡だらけにしようとするが、どうもうまく泡が立たない。腹を立て、立ちあがってシャワーをひねる。角度をまちがえていたため、いきなりしぶきが顔にかかった。

そのとき、電話が鳴った。

やっと夫がさがしあてたらしい。友子はバスタオルを腰に巻きつけて駆けだした。外に出た拍子にタオ

ルが落ちた。一瞬立ちどまったが、ここは密室であると気づいて、彼女はそのまま進んで受話器を手にした。

交換手のコールがあつて、相手が出た。

「あなた、今までどこにいたの？」

先に声をかけ、別にシングルの部屋を取りなさいと意地悪を言つてやろうとして、友子は息をのんだ。
「私ですよ」

聞こえてきたのは空閑の声だった。

「あら……すみません。あたし早合点しちゃつて……」

友子は体じゅうを羞恥にそめ、落としたタオルに視線を向けた。電話を中断して、拾いにもどるのもぐあい悪かった。

「いやいや。それより、あなたの御亭主、安中良夫と言つて、富倉商事に勤めているんじゃない？」

「そうですけど、どうしておわかり……」

「じゃ、まちがいない。今、ラジオで聞いたんだが、交通事故に会われたらしい」

友子の裸身が、一瞬彫像のように凝結した。

「それで、どうなんでしょうか？」

友子は受話器の向こうの空閑に、すがりつくようにたずねた。

「ニュースでは重傷と言つていた。大阪の方の病院らしいから、あなたはすぐ仕度をしてロビーにいらつしやい。場所は私が調べてあげる」

かちんと音がして電話が切れた。

友子は衣服を身につけながら、今まで良夫が迎えに来なかった理由に、どうして最も可能性の多い交通

事故を考えなかったのか不思議でならなかった。空閑が知らせてくれなければとんでもないことになるところだった。夕食を空閑にごちそうになって、ホテル代に余裕ができた彼女は、夫があらわれなければもう一日のんびり見物などして帰るつもりになっていたのだ。

友子が急いでロビーにおりて行くと、空閑が待ちうけていた。

「病院は吹田だそうだから、車を呼んでおきましたよ」

「あの、吹田まではどのくらい……」

電車が列車で行くつもりでいた友子は、車代が気がかりだった。夕食はおごってくれたものの、空閑は高価なステーキを注文していた自分を金持の若妻と思っているかもしれない。

「もう九時すぎだから、とせば三十分くらいのもんじゃないかな。世話の焼きついでに、病院まで送りましょう」

「でも、そんなごめいわくを……」

「何、私は暇だからお気兼ねなく」

さあ、と言うように空閑は顎をしゃくって玄関の方へ大股に歩きだした。友子はふと、この人は私を変なところへ連れて行くのではないかと思ったほど、その後姿には強引な逞しさがあった。たとえそうでも――友子は引きずられるように、小走りになってあとにつづいた。

二人を乗せた大型のハイヤーは、名神高速道路に入ると一気に飛ばし、二十分足らずで吹田に着いた。良夫がかつぎこまれた救急病院は、インターチェンジのすぐ近くにあった。

「ほんとに、すっかりお世話になって……」

料金はどうしたものかと思案しながら、礼をのべようとした友子を空閑はせきたてた。

「いいから、早く」

友子は車を降りてぎくりとした。先に降りた空閑が、運転手にしばらく待つように命ずると、このこ病院の方へ歩きだしたからだ。良夫の知人にでも見つかったら事である。空閑は友子の気配を察して振りかえった。

「ご心配なく。私は別の見舞客のような顔していますよ。用がないと判断したら勝手に帰りますからね」
「そうですか、すみません」

これだけ親切にしてくれている空閑の行動に文句はつけられない。友子はそ知らぬ風をよそおって病院の門をくぐった。

待合室に入ったとき、友子の体がまたびくくとふるえた。そこには、思いがけぬ良夫の両親の姿が見えたからだ。報せがあつて東京から駆けつけてきたらしい。

「友子さん、あなたどこにいたの？」

目ざとく見つけた姑の立子が、中年ぶとりの体をはずませて椅子から立ちあがった。気が立っているだけではない、険をふくんだ言葉だった。

「事故のこと、今しがた知ったんです。病室はどちらですか？」

友子は舅の安次郎に視線を移しながらたずねた。安次郎は、ちょっと待つようにと制した掌で、禿げあがった艶のよい頭をなでた。話したときの仕種である。

「さっき手術が終つてね、今、その後の様子を診察しているところだよ。命はとりとめたようだが、頭をやられているので話は無理らしい」

「そうですか……」

術後の診察がすむまでは部屋にはいれぬとわかって、友子は両親とならんで待合室の椅子に腰をおろした。肩幅の広い空閑の後姿が、玄関を出て外の闇に消えて行くところだった。

この病院は、玄関ホールが待合室になっている。午後十時近い時刻なのに、急患が重なったのか、看護婦たちが入れかわり足早に行き来し、十人前後の見舞客が不安そうに立ったり掛けたりしていたので、誰も空閑と友子のつながりに気づいたものはいなかった。

翌朝、友子はKホテルの食堂で空閑と顔を合わせた。

今夜は絶対安静が必要なので、家族がいても仕方がないと医師に言われ、あれからまもなく、両親は大阪のホテルへ、友子はKホテルへ引きあげてきたのだった。

部屋に帰ると、ドアの内側に紙片がこすりこまれてあった。もどってきたら知らせるようにという空閑からの伝言だった。だが、帰りは、タクシー、電車、タクシーと乗りついできたので、午前零時をすでに過ぎていた。

「ものは考えようだ。命が助かっただけでも運がよかったと思わなければね」

昨日の昼すぎ、万博会場のあと始末に関する商用をすませ、タクシーで吹田に向かう途中の事故で、ダンブと衝突して運転手は即死だったという友子の報告を聞いて、空閑はそんなありきたりの感想をのべた。

「ほんとに、お世話になりました」

「いやいや、これも何かの縁ですよ」

話が一段落したところで、空閑が何かを思いだしたように、語調をあらためてたずねた。

「昨夜、病院に見えていたのは？」

「主人の両親です。それが何か……」

「昔知っていた人に似ていたものでね。御亭主の親御さんなら、やはり安中と言われるわけですね」

「ええ。安中安次郎です」

「安中、安次郎……」

「とてもいい義父ちちですよ。義母ははの方は私と主人の結婚に猛反対だったのを、義父がまとめてくれました。ふだんは義母の言いなりなのに、そのとき、びしっと押えて……」

友子は言わずもがなのことを口にしたと気づいて、軽く肩をすくめた。そして、あ、と小さく呟いた。

「そうそう、うっかりしてましたけど、義父は養子なんです」

「以前の名は？」

「寒江、寒いお江戸の江です」

空閑の目がきらりと光ったように見えた。だが、彼の言葉はおだやかだった。

「そうですか」

ホテルの朝の食堂は人の出入りがはげしかった。とくに日本人客の回転が早い。そのなかで、友子は空閑とのんびり組に属する朝食をとっていることに、うしろめたさをおぼえていた。

吹田病院に入院している良夫は、すぐには動かせそうにない。これからしばらく泊りこむことになりそうなので、ホテル最後の朝食ぐらいゆっくりという気持ちで開きなおってはいいたものの、昨夜、話もできなかった。偶然知らけの夫のことがやはり気がかりだった。

それに偶然知りあった正体不明の中年男の世話になり、こうして朝食を共にしていることが、夫を裏切り、不貞を働いているようにも思われてくるのだった。

「ではあたし、ぼつぼつ出かけますわ」

食後のコーヒーを半分すすったところで、友子がそう言ったのは、いくらか話の時間を残しておくためだった。

立ちあがってしまったから、強引に送ってあげようなどと言われたら困るのだ。送ってもらいたい気持ちがないのではないが、そんな冒険をしてまでそばにいてもらいたいほど親しくはなっていない。

ところが、空閑はそうした友子の思案とは全く別のことを口にした。

「あなたは、お金の用意してきていないのじゃないかね」

何となく友子の挙動から察していたのである。友子は首をすくめた。

「ええ。でも主人が少しは持っているはずですし、足りなければ取りに戻りますわ」

友子夫婦は両親とは別に暮している。親には借りたくないという気持が、取りにもどるといふ言葉になつてあらわれたのだ。

「取りにもどらなくても、これをお使いなさい」

空閑は内ポケットから封筒を取り出した。そうするつもりで用意していたものようだった。かなり分厚い。

「そんな……大丈夫です」

「だろうけど、金は余裕があつた方が安心だよ」

空閑の態度があまり無造作だったので、友子は思わず、それが夫の給料袋でもあるように手を出した。あれば助かるという気持が動いていたこともたしかだった。そして、あわてた。

「あの、では、拝借させていただきます。でも、どこへお返しに行けばいいんですの。お名前だけしか伺つておりませんわ」

「あ、そうだったか。ま、どうでもいいが、私はここにいる」

空閑はやつと名刺を出した。住所は赤坂の△空閑ビル▽と印刷されていた。

友子は空閑の真意がどうしても理解できなかった。彼の言動は、これまで彼女に言いよつた男たちとは全く異質だった。野心は感じられぬのに、どの男たちよりも男を感じさせる。

「ビルをお持ちなんですわ」

「暇ができれば、遊びにいらっしゃい」

「はい。かならず」

「今日は送らないよ。仕事があるのでね」

「はい。いずれまた……」

空閑と別れてホテルの払いをすませ、玄関に向かう友子の足取りは軽かった。そして、これから看病に行く病院の夫に、また、ちょっとすまない気分が湧いた。

雪の風景

空閑伴成は、彼の一人暮らしの城である持ちビルの七階の部屋で、遅い朝の洗面をすますと、窓辺に立つてカーテンを引いた。粉雪が舞っていた。降りはじめたところらしく、積もってはいなかった。

隣りのビルの屋根ごしに、東宮御所の森が見える。無数に重なりあう粉雪の層が、寒冷紗をすかしたようにその風景をぼかしていた。昼前の時刻なのに、夕方のように暗かった。

あれから四日になるが、友子からまだ何の音沙汰もない。交通事故に会った夫の容態が思わしくなく、帰ってこれないでいるのだろう。情念が、別々の生きもののように空閑の内部で動きはじめていた。

彼はほとんどそれを忘れかけていたが、しかし決して忘れてしまったのではなかった。さがしまわったときは手がかりもつかめなかった男の行方が、偶然とも言えぬほどの偶然から、彼の前に姿をあらわしたのだ。